

フエミニストが捉えた封城の真実

郭晶著／稲畑耕一郎訳
武漢封城日記四六判 332頁
潮出版社
[本体1,600円 + 税]

小川 利康

二〇二〇年一月三日朝一〇時、武漢は「封城」された。このニュースを最初に読んだのは『東京新聞』だったはずだが、当時の記事を読みかえすと、「武漢市民は移動自粛」と記すのみで「封城」も「ロックダウン」もない。中国語の「城」、「城市」が都市を意味することは初学者でも知っているが、「封城」となると、一般の中日辞典はもちろん、『漢語大詞典』にもない。中文版「ニューヨーク・タイムズ」一月二三日付の記事では「武漢 封城 控制新型冠状病毒疫情」とカッコ付きながら「封城」と記す。恐らくこれが初見の「封城」だった。もつとも同紙英文版の見出しは「遮断」(isolation)を使い、「ロックダウン」(lockdown)はない(記事本文には出てくる)。

そもそも「封城」は古典漢語でも通常使われないと、本

書の記者稲畑耕一郎は指摘している。中国の都市は伝統的に夜間城門を閉ざし、治安を維持するのが当たり前で、わざわざ「封城」とは言わない。使うとすれば「籠城」「困城」だと言う。しかし、近代以降、都市住民は交通と通信の自由を享受し、原則二四時間移動が可能になった。だからこそ、一千万人の大都市武漢から移動を禁じることが本当に可能なのか、海外メディアが疑念を持ったのも当然である。著者の郭晶自身、「これが一体どんなことを意味するのか、誰も知りませんでした」とプロローグで述べるように、その真相を誰も知らぬまま、「封城」は始まった。本書はその辿り着く先が何なのかを示唆してくれる貴重な記録である。

本書の著者郭晶(図一)は河南省の信陽師範学院卒業後、「社工」(社会工作者)として働く。二〇一四年夏、就職活動



図1 著者郭晶近影（本人提供）。

時に受けた不当な性差別を裁判所で争って勝訴したことが彼女をフェミニズムへと導いた。二年間余り杭州で働いた後、二〇一六年末に広州へ移った。二〇一七年から「職場での女性差別をゼロにする法律ホットライン」(074 職場女性法律熱線：074とは歧視「174」¹⁾をゼロにする意)を微信公衆号として開設し、無報酬で女性権利を保護するための法的支援を行ってきた²⁾。広州で活動開始後、家庭内暴力への抗議活動

で知られる肖美麗との交流も始まり、活動の幅を広げた。しかし、公安当局による妨害を度々受けたためか、二〇一九年一月に武漢に移り、引越して間もない二〇二〇年一月末に武漢でロックダウンを経験した。街にも人にも馴染みがないなかで過ごした日々を綴ったのが本書である。『BBCニュース』

(一月三〇日付)、『ニューヨーク』(二月七日付)、『ガーディアン』(三月一五日付)で紹介されたことで注目を集めた。NHKのドキュメンタリー番組「封鎖都市・武漢」76日間市民の記録」(BS1スベシャル、五月四日放送)でも取り上げられ、番組でインタビュアーに答えている。

海外では大きな反響があったものの、本書が台湾で出版されると、早くから注目を集めていた方方「武漢日記」と間違えられたり、方方の名をかたった盗作と指弾する者さえいた。中国国内では郭晶がいかにも無名であったかを示すエピソードであろう。

それだけに彼女の立ち位置をもう少し理解するためにも職業について注意しておきたい。「社工」とは日本語に訳せば「ソーシャルワーカー」となるのが、医療、福祉分野で働く専門家という日本の定義とはだいぶ異なる。著者は主に職場での差別や家庭内暴力から女性を救うために活動するフェミニズム活動家であり、オンラインインタビューによると、本人自ら日記執筆の動機として「執筆も一種の社会行動」であると捉え、日記によって「目下の状況を記録し」、「日常を取り戻し」、制約があるなかでも「行動し続け」、社会との「つながりを持ち」、「公の場で発言する」ことを目指したという³⁾。

この意図に沿って書かれた日記には、著者の内面に触れる記述が少ない。「これは私の日記なので、文章の中には当然「私」がいますが、自分の感情を出すことはなるべく控えめました」（プロローグ）と述べるように、感情の機微に触れることは意識的に回避されている。日記で最もウエートを占めるのは、武漢で暮らす市井の人々の動静に関する記述であり、著者は冷静に観察する目に徹している。

日記ゆえ内容要約は難しいが、封城時期の武漢の状況を反映して、大きく内容を二分できる。前半は封城されたものの、外出の自由があった時期（一月二三日から二月一日まで）であり、後半は完全に「封閉管理」が行われ、アパートの敷地からほとんど出られなかった時期（二月二日から三月一日）である。邦訳が定本とした台湾聯経出版のテキストは三月一日の日記までしか収録しておらず、「封城」解除（四月八日）まで一ヶ月が欠けているのは残念だが、「封城」の実態は十分うかがえるものである。

前半時期、著者は日中「封城」された街中を散歩し、出会った市井の人々から身の上話を聞いている。聞き取りをしたのはほとんどが路上で働く清掃作業員である。著者は現代中国社会の最底辺で生きる彼らの声に耳を傾け、なけなしのマスクを贈るなどして励ましている。性差別と戦う彼女にとって弱

者を助けることは活動の原点だった。

封鎖の中で、多くの人がともにネットワークを築き、さまざまな弱者の求めに注意を払い、数多くのボランティア活動を成し遂げています。これは暗闇の中の光であり、私たちの行く道を照らしています。（プロローグ）

だが、かねてからフェミニズム活動家として注目を集めてきた著者の言論はネット上でしばしば削除され、ブロックされてきた。日記でも自ら述べる通り、第一章の最初の日記も文字として発信できず、画像で発表されたものである（図二）。その活動を側面から助けたのが肖美麗であった。台湾聯経出版のテキストに収録する水彩画とおぼしきイラストの作者であるが、フェミニストとして著者と共闘する仲間であり、日記のなかでビデオチャットをする友人の一人である。彼女の運営する微信公衆号（硝美丽）を経由してシェアされることで、著者は読者を獲得することができた。題名も「郭晶的 捂汗風塵 日記」（武漢封城を言い換えたもの）に書き換え、カムフラージュしたにもかかわらず、二月五日から八日の部分は削除されたという。

このような言論弾圧は、「封城」下に限らず、現代中国社



社工郭晶

1月24日 17:52 来自 微博 HTML5 版
#武汉封城#文字发不出来

↑ 收起 | 🔍 查看大图 | ↶ 向左旋转 | ↷ 向右旋转

1月23日

我算是一个遇事冷静和淡定的人，直到1月20日武汉新增病例过百，别的省市出现病例，我开始感到不知所措。此前公布的消

図2 微博（社工郭晶）より「テキストでは送信できない」と記している。

の、同時に公安当局も容易に管理できるようにになった。これに対抗するため、上記のように検索でヒットせぬよう文字を画像にしたり、同音で言い換えたりしても、結局は削除されてしまう。武漢で孤立無援のなか、著者が唯一心の拠り所としたのが、ビデオチャットだった。日記ではほぼ毎日ビデオチャットを二、三時間したと記しているように、この仮想

会で広く行われている。往年であればゲリラの大字報を街中に張り出して見解を表明しただろうが、現代中国の言論空間はSNSが中心であり、その利便性ゆえに広く伝播するも

空間こそが思想上の同志たちと集える貴重な場だったのである。著者はチャットでお互いの秘密を明かすというゲームをしたと語り、映画『陰道の道』（中国版『ヴァギナ・モノローグ』）の言葉として次のような言葉を引いている。

「我々が口にしないものが秘密となり、これらの秘密が羞恥心、恐怖、神話を生む」（一月二十八日日記）

この言葉はもちろん現代中国の言論状況に即して述べたものではない。だが、直接的に言明すれば発言が削除され、時には身体まで拘束される現状において、この言葉をどれだけ深読みしても行き過ぎではないだろう。この発言の後、武漢はコロナ感染者数がピークに達した。現在公開されているデータは信頼できず、実態はそれ以上の感染者が出ていて、医療現場は完全に崩壊状態にあったと推測される。そのなかで武漢市政府は管理をさらに強化し、住民の外出を完全禁止する「封閉管理」へと移行し、行動の自由、言論の自由、いずれも厳しく制限した。二月七日未明、「笛を吹く人」李文亮^③医師の死が報じられると、SNS上には哀悼の声が次々と湧き起こったが、相次いで削除され、書き込みと削除のいたちごっことなった。李医師の死を悲しむ著者の日記も肖美麗の

公衆号に三度発表して三度削除され、ついにオンラインでは読めなくなつた。この時武漢には恐るべきデイストピア的状况が生まれていと評者は考える。言論だけではなく、行動も制限された管理社会の出現である。日記をようやく投稿できるようになった二月中旬、友人から「いま何が足りない？」と問われた著者は考える間もなく「自由！」と答えたという（二月十三日日記）。

その後も厳しい「封閉管理」のもとで家庭内暴力（DV）が増加したことを懸念する記述が二月二十八日の日記に見える。日記中にはそれ以上の言及はないが、著者はその翌日DVをテーマとするオンライン講座で司会を務めている（肖美麗の微信公衆号二月二十九日付）。日記に書くことには限度があり、巧みにメディアを使い分けながら粘り強く抑圧と闘う様子がうかがわれる。

最後に聯経出版単行本（電子版）のために書かれた「後記」で、著者は「封城」期間中に公定価格の肉がゴミ収集車で運ばれてきたことを後日知つたと述べ、「封城」期間中に受け取つた食料が余り新鮮ではなかつたのも仕方ないと淡々と述べながらも、次のように続ける。

私は映画の『スノーピアサー』の中で、列車の最後尾に

乗る人が食べるタンパク質の肉の塊がゴキブリで作られているのに、彼らは自分が食べているのが何かを知らなかつたという話を思い出しました。（「後記」）

この一節はネット上の日記にはないようだが、訳者は次のようにこの映画について念入りに注釈を加えている。

二〇一三年のアメリカのSFアクション・スリラー映画。時は二〇三一年、温暖化を食い止めるために散布された薬剤によって世界は寒冷化が極端に進み、生き残つた人類は、極寒の雪と氷の中で永久機関によって動き続ける列車『スノーピアサー』（走る箱舟）の内部で暮らし続ける。

この列車には前方車両で暮らす富裕支配層と後方車両で列車を動かす部品として働く貧困層とに分かれ、奴隷のように働く主人公はある日ついに反乱に立ち上がり、ふとした偶然から自分の食料の原料がゴキブリだと知つたという。もしこの注釈がなければ、評者は気がつかずに読み過ごしてしまつただろう。幸い訳者の配慮によって、著者の強い怒りが隠されたメッセージを受け取ることができた。ここでは紹介しきれないが、著者は大きな制約の下で出来る限りのメッセージ

を私たちに伝えようとしている。そのギリギリのメッセージを私たちは真摯に読み取り、未来への教訓としなければならぬ。

訳者の稲畑耕一郎氏は、中国古代学を専門とする大家であり、四川三星堆研究をはじめとして、出土遺物からみた中国文明を幅広く研究されている。二〇一八年三月に早稲田大学文学学術院を定年退職された後も北京大学中国古文獻研究センター兼任教授、南京大学文学院客員教授を歴任、中国各地で精力的に研究活動を展開されている。「訳者あとがき」によれば、二〇一九年三月末には集中講義のために武漢大学も訪れ、名にし負う満開の桜を楽しまれたという。武漢を含む湖北省一带には考古遺跡も多く、幾度となく訪れた彼の地に起きた悲劇に胸を痛めたのが専門外の翻訳を手がけられた動機であると仄聞する。

この日記が一人でも多くの日本人に読まれ、武漢と我が身の状況を重ね合わせながらポスト・コロナに來たるべき社会を展望されることを心から願っている。

【注】

(1) 稲畑耕一郎「封鎖都市」に暮らして——郭晶『武漢封城日記』を読む」(月刊『潮』二〇二〇年一月号)。

(2) 微博を参照し、不明点はご本人より電子メールで情報提供を受けた。なお、公衆号とは一般に企業が消費者向けに情報サービスを提供するためのオフイシヤル・アカウントを意味する。郭晶の場合はそのシステムを利用して法律相談を受けている。

(3) 「郭晶『武漢封城日記』新書分享会」(動画、「新加坡書展」作家会客室二〇二〇年五月二二日、<https://singaporebookfair.sg/>、同年一〇月一七日視聴)。

(4) 中国語(繁体字)版は電子版で日本のオンライン書店でも入手できる。郭晶『武漢封城日記』(Amazon kindle 版、聯經出版事業股份有限公司、二〇二〇年五月)。紙版は二〇二〇年三月刊行。東方書店のHPや店頭にて入手可能。

(5) 李文亮はコロナウイルス感染拡大の危険性に気づいていち早く警鐘を鳴らした武漢市中心医院の眼科医師。二〇一九年一月三〇日、感染症拡大の危険性を微信のグループ・チャット(聊群)で発信したところ、「事実無根のデマを拡散した」として公安当局から譴責を受けた。その後、自らも診察中にコロナウイルスに感染、死亡した。死後、湖北省人民政府は李ら感染死亡した医療関係者に「烈士」の称号を贈っている。

(おがわ・としやす 早稲田大学)